

## 要旨

精神分析理論の中でも治療論は要である。精神分析治療の本質は、無意識を意識化する、抵抗を克服するなど様々な言い方がされてきたが、本論文では納得という観点から精神分析治療を考えることを提案する。そのために精神分析の治療過程においては患者の納得が見られることを示す。

具体的には、Ⅱ．症例研究でフロイトの各症例（「ヒステリー研究」の3症例、ドラ、ハンス少年、鼠男）を取り上げ、回復へと向かう際の患者の発言などを順を追って丁寧に抜き出し、そこでは自己の無意識の願望や現実の状況に対する納得が起こっているのだと主張する。次にⅢ．フロイトの治療論のまとめではフロイトの治療論を概観し、精神分析の治療を、記述的——無意識を意識化する、経済論的——リビドーを現実へ振り向ける、力動的——転移を通して抵抗を克服する、の3つに分類する。

Ⅳ．考察ではまず国語辞典を参考にして納得という語を「他人の考え、行動などを理解して受け入れること」だと定義する。その定義に従うと納得という語を自己に対して用いる場合に矛盾が生じるが、自己の内に他者なる無意識を認める、あるいは他者には自己の願望などが投影されていると精神分析的に考えることによってその矛盾を解消する。また、この論文で提起する「納得」という語は、フロイトの原文では“überzeugen”であると明示し、別の箇所では確信というように日本語に訳されているが、それも本論文の納得という概念に含まれることを確認する。そして前章までで示したことを組み合わせて、記述的——無意識を意識化するとは自己の無意識の願望などを納得すること、経済論的——リビドーを現実へ振り向けるとは現実の状況を納得すること、力動的——転移を通して抵抗を克服するとはそのための方法であると整理する。最後にラカン理論に少しだけ触れ、精神分析治療の目標は大文字の他者AとSとの関係を納得することであると、ラカンの用語を使って言い換える。

## 目次

I. はじめに.....	1
II. 症例研究.....	1
1. エミー・フォン・N夫人.....	1
2. ミス・ルーシー・R.....	3
3. エリーザベト・フォン・R嬢.....	5
4. ドラ.....	6
5. ハンス少年.....	8
6. 鼠男.....	10
III. フロイトの治療論のまとめ.....	12
1. 記述的——無意識を意識化する.....	12
2. 経済論的——リビドーを現実へ振り向ける.....	14
3. 力動的——転移を通して抵抗を克服する.....	17
IV. 考察.....	22
1. 納得という語の辞書的な定義.....	22
2. フロイトの原文との対応.....	23
3. フロイトの症例研究に見られる納得、および精神分析治療論との関係.....	25
4. ラカン理論への展望.....	26
V. おわりに.....	27
参考文献.....	29

# 精神分析の治癒について

——「納得」という語を通じたフロイト治療論の再検討——

平成13年入学 総合人間学部 人間学科 人間関係論専攻 浅野直樹

## I. はじめに

この論文では精神分析治療を取り上げる。精神分析はそもそも臨床上の必要から編み出された。よってその治療論は精神分析理論の中心を成すと言える。しかし現在では、その理論は各種の精神療法に取り入れられているとはいえ、古典的な精神分析療法はあまり盛んではないようである。多大な時間と費用が伴うことなどが理由であろう<sup>1</sup>。精神分析治療の要点を描き出すことができればこの問題について考える際にも役立つかもしれない<sup>2</sup>。

以下、II. でフロイトの症例を患者の感情に注目しながら振り返り、回復へと向かう時に納得が起こっていることを示す。III. ではフロイトの精神分析治療論を3つの側面から分類する。IV. では納得という語を詳細に検討し、フロイトの原文との対応を明示し、III. で挙げた3つの治療論の分類と納得との関係について考察する。最後に少しだけラカン理論にも触れる。この論文では大雑把に精神分析治療について考察するので、その対象は主に神経症圏である。

## II. 症例研究

症状が回復に向かう時に患者はどのように感じていたかという点に注目しながらフロイトの症例を検討する。

### 1. エミー・フォン・N夫人

N夫人はフロイトが始めて治療した患者である。主な症状はチックやどもりなどの言語

---

<sup>1</sup> このことに関してフロイトは、精神分析療法では長い時間と多大な費用とを要すると述べている（「分析治療の開始について」 1913（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』人文書院 1983））。

<sup>2</sup> この問題に対しては、Balint, M. の焦点化精神療法から、Malan, D. H. のブリーフ・サイコセラピー、Mann, J. の時間制限付き精神療法などの短期精神療法が試みられている。

障害、不意に人が現れることに対してのひどい不安、食欲不振である。フロイトは催眠状態で話をする形で、個々の症状の背景にある出来事を思い出すように治療した。

彼女が催眠状態でどもりが始まるきっかけとなった出来事について感情を伴って回想した時からその症状が治まった。<sup>3</sup>

「この時 [子供たちを乗せた車をひっぱった馬が勝手に走りだした時と、馬の目の前に雷が落ちて馬がおじけづいて、自分が落ち着いていないと叫び声で馬をますますびっくりさせてしまうと考えた時]<sup>4</sup>から吃りが始まったのです。この話は彼女を異常に興奮させた。さらに彼女から聞きだしたのは、吃りは二つの誘因の初めの方のものの直後に始まったのだが、しばらくたつと止んでしまい、第二の誘因以後は、くせになってしまったという点である。私はこれらの情景のなまなましい回想を打ちけし、そしてそれをもう一度思いうかべるように彼女に命じた。彼女はそれを試みている様子だったが、それでも落ち着いていた。この時以来、彼女は催眠術中に話をする時、決して痙攣的にとぎれることなしに話すようになった。」<sup>5</sup>

外側からはなぜこの出来事から吃るようになったのかわかりにくいだが、本人の中では納得に近づいたようである。

未知の人に対する異常に強い不安については催眠中に次のように語っている。

「[夫が死んで] それからの三年というものはずっと彼女は子供を憎んだが、それは、もしこの子のためにベッドに寝ていなかったとしたら、元気で夫を看病してあげられたかもしれないと、彼女はいつも内心思っていたからである。夫の死後、彼女は怒ったり、興奮したりばかりしていたという。夫の親戚たちはつねに彼らの結婚に反対し、その後も彼らが幸福に暮らしていることを快からず思っていたから、彼女が手ずから彼に毒をもったのだなどという噂さえまきちらした。彼女は捜査をしてもらおうと思ったほどであった。親戚たちはいやらしい三流文士を使って、彼女にありとあらゆる中傷を加えてきた。このごろつきは回し者をあちこちに放って彼女を追いまわさせ、地方新聞に彼女を誹謗する文章を投書して、彼女のところへその切抜きを送ってよこした。彼女の人間ぎらいや未知の人に対する憎しみはここに原因があるのだ、というのだった。私が夫人の話に対して慰めの言葉を述べると、彼女はそれで気が軽くなりましたと語った。」<sup>6</sup>

<sup>3</sup> 以下、引用部には「」を付け、2字分下げて記す

<sup>4</sup> 以下、引用中の [] 内は筆者による

<sup>5</sup> フロイト、S 「ヒステリー研究」 1895（懸田克躬、小此木啓吾訳 『フロイト著作集7』 人文書院 1974 p33）

<sup>6</sup> 前掲書 p38

これが本当の原因だとすると、当然の反応なのでどうして神経症になったのかよくわからない。未知の人を疑ってはいけないという別の理由があったのかもしれない。とにかく納得できて気が軽くなったのだろう。

食欲不振は一度治療を中断して、再開してから扱われた。彼女はフロイトに言われてたくさん食べたせいで胃の調子が悪くなったと主張した。フロイトはそうではなく心配のせいだと説明した。

「あなたの痛みは心配しながら飲み食いしたからおきたにすぎません、と。明らかにこの説明によって、私は彼女に重大な印象を与えたようであった。」<sup>7</sup>

彼女は反抗心に燃えているようで、このすぐ後に催眠術が初めて不成功に終わった。フロイトは二十四時間後に同意しないのなら帰郷してもらおうと強く言った。そして彼女は次のように認めた。

「私の心配からおきたのだと思います。でもこれは、先生がそうおっしゃったからそうなのすぎませんわ」<sup>8</sup>

フロイトに言われたせいでしぶしぶ認めたようにも思われるが、直後に催眠状態で小さいころに無理やり食べさせられたことや水あたりを起こしたこと、痰壺のせいで食欲をなくしたがそれを表に出さないようにしなければならなかったという話をしたので納得しているように思われる。

以上のように、それぞれの症状について自分の無意識に由来する願望などを認めて納得したので症状が治まった。

## 2. ミス・ルーシー・R

フロイトが親しい同僚に紹介された、ある工場主の家で住み込みの家庭教師として働いている若い婦人である。主観的な臭いに苦しめられている。夢遊状態にならなかったので催眠を断念した。

症状である主観的な焦げたプディングのにおいからの連想を聞いて、フロイトは、彼女が社長さん（工場主）を愛していて、子供たちの母親の地位につこうとしていると解釈した。それに対して彼女は次のように答えた。

「彼女の答はいつものように言葉少なだった。ええ、そうだと思います。——けれ

---

<sup>7</sup> 前掲書 p 56

<sup>8</sup> 前掲書 p 56

ども、あなたは社長さんに恋を感じていることを意識しながら、どうしてそれを私に話してくださらなかったのですか？——意識していたわけではありません。というよりは、意識しなかったのです。私はその考えを、頭の中から追い払おうと思っていました。そんなことを決して考えまいと思いました。そしてちかごろはそういうふうになれたと思っているのです。」<sup>9</sup>

社長さんへの愛情が意識に上り始める。なぜその愛情を認めたくなかったのかもすぐに明らかになる。

「その時 [母親を失った子供たちの教育についてどれだけ彼女を頼りにしているとか、とって、じっと彼女を見つめた時] の御主人の眼差しは、話の内容との関係でおそらくなくなった奥さんに向けられていたのでしょう、と私が言うと、彼女もそれに全く同意し、自分の愛情がまるきり望みのないものであることをはっきりと認めた。」<sup>10</sup>

これで納得したように思われるが、すぐには根本的な変化が見られなかった。焦げたプディングの臭いはすっかりなくなったが、次は葉巻のにおいが鼻について困ると訴えた。

葉巻のにおいからの連想で、子供の口に接吻することを許すなんて、もう一度こんなことがあれば子供の教育は任せられないと突き放して言われ、社長さんからの愛情が期待できないと悟った事件を彼女は想起した。

それからしばらくたって、彼女はうって変わって機嫌よく現れた。そのわけをこう説明した。

「「昨日の朝目をさましたら、重苦しいものがすっかりとれて、それからは元気になりました」——それでは、お邸でのあなたの見込みはどうになりましたか？——私にはっきりしていることは、見込みがないことを自分で知っていることと、かといってそのために不幸になりはしないだろう、ということです。——邸の人たちと今度はうまくいきますかね？——あれはたいがい、私が敏感すぎたせいです。——それで社長さんをいまでも愛しておいでですか？——ええ、愛しております。でもただそれだけのことなのです。自分ひとりで好きなことを考えたり感じたりするのは自由ですから。」<sup>11</sup>

こうして自分の社長さんへの愛情と、そのために不幸になるわけではないという現実の

---

<sup>9</sup> 前掲書 p 89

<sup>10</sup> 前掲書 p 90

<sup>11</sup> 前掲書 p 93

状況を納得して完全に回復した。

### 3. エリーザベト・フォン・R 嬢

歩行が困難になるほどのヒステリー性の疼痛を両足にもつ若い婦人である。父親が亡くなり、母親が目の危険な手術を受け、姉が出産の後心臓病で倒れたりして、その看病を一身に引き受けることになったそうである。催眠にはかからない。

疼痛が何に関連しているかが徐々に明らかになってゆく。そして一番激しく痛む場所と関連する出来事が見つかった。

「いままでこの [いちばん激しく痛むのは父の看病で包帯を取りかえる際に脚をのせた場所だという] 関連に思っていたらなかったのは不思議なことです、と彼女は言った。」<sup>12</sup>

少し納得したせいか、痛みとともに話をするを続けて、目に見えて回復した。しかし、以前と同じように激しい痛みが襲ってくる時もあった。

さらに分析を進めて義理の兄を愛していることを抑圧しているのではないかと考えられた。そのことを彼女に告げると、非常にショックを受けたようだが、少しずつ落ち着いてきた。

「私が事実関係を味もそっけもない言葉で集約して、だからあなたは前から義兄の方に恋をしていたわけです、と言った時、彼女は大きい叫び声をあげた。この瞬間に彼女は激しい痛みを訴え、この説明を拒否しようと、なおも絶望的な努力を傾けた。そんなことはありません。そんな悪いことは私にはできません。私がそんなことを決して自分に対して許すはずはありません、と。彼女自身が述べたところからすると、これ以外の解釈が許されないことを彼女に証明するのはやさしいことだった。しかし、私が慰めのためあげた二つの根拠、すなわち、誰も感情に対して責任を負うことができないこと、および彼女の態度、つまりあの誘因による発病は、彼女の道徳的性質を示す十分な証拠であること——いわばこのような慰めの言葉が彼女に効果をおよぼすまでには、長い時間を必要とした。」<sup>13</sup>

この除反応は決定的なよい効果をもたらした。母親も義兄に対するエリーザベトの愛情を感じていたこと、周りは特に賛成しているわけでもないこと、義兄は気持ちのうえで再婚できるほどに回復しているか確かではないことなどの現実の状況を彼女と話し、治療

---

<sup>12</sup> 前掲書 p 120

<sup>13</sup> 前掲書 p 129、130

は終結した。

#### 4. ドラ

ドラは18歳のときにフロイトの患者になった。症状はヒステリー性の咳、失声、不機嫌などであった。夢の解釈がこの治療の特徴であるが、ここではそれについては詳しく触れない。

父と父の看病をしていたK夫人との関係を黙許していたことや、K夫妻の子供たちに対する行動から、ドラはK氏を愛していたという推論がなされた。しかし彼女はそのことを進んで認めようとはしない。

「私がこの推論を口にしたところ、彼女はそれにまったく同意しなかった。なるほど彼女はすぐ、他のひとびと、たとえばひところBを訪れていた従姉妹から、「あなたは、あの男にすっかりお熱ね」といわれたことがあった、と告げはした。だが彼女自身は、このような感情を思いたそうとしなかった。後日、想記された材料が集積されて、何とも拒否することが難しくなると、彼女は、Bでは、K氏を愛していたかもしれないが、湖畔の事件以来、それは終わってしまった、と告白したのだった。」<sup>14</sup>

神経性の咳についてフロイトの解釈を受け入れるとその症状は消失した。

「この[父とK夫人の口による性的満足の光景を想像しているという]解釈を彼女は黙って受け入れたが、その直後から咳は消失した」<sup>15</sup>

ただし自然に消失したのかもしれないと付記されている。また、フロイトはドラの父親への愛着を指摘する。

「私がドラに、あなたの父親に対する愛着はすでに早くから、まったく恋愛と同じ性質をもっていたと認めないわけにはいかない、と告げると、彼女は例のごとく、「私には思いません」と答えはしたが、すぐに彼女の七歳になる従妹(母方の)について——彼女はこの従妹のなかに、いわば自分の幼年時代の反映のようなものが見られると思っていた——これと同類なことを報告した。」<sup>16</sup>

---

<sup>14</sup> フロイト、S 「あるヒステリー患者の分析の断片」 1905 (懸田克躬、高橋義孝他訳 『フロイト著作集5』 人文書院 1969 p299)

<sup>15</sup> 前掲書 p307

<sup>16</sup> 前掲書 p314



納得はしていないものの間接的に認めたことになる。その後、K 夫人への同性愛的傾向と K 夫人の裏切りについて推測がなされた。

次に夢の解釈がなされる。第一の夢では、宝石箱が女性性器を表現するものだというところまでは認めるが、そこから引き出された K 氏への強い愛情があるという解釈には同意しようとしなかった。

「つまり女性性器を表現するものとして、この「宝石箱」という言葉はこのんで用いられているのです。

「先生がそれをおっしゃりたいのは分かっていました。」<sup>17</sup>

「私の解釈のこの [K 氏への強い愛情が存在するという] 部分に彼女はもちろん同意しようとはしなかった。」<sup>18</sup>

父親への復讐空想や男性が女性性器に挿し入ろうとする破瓜空想がかくされているといった第二の夢の解釈は認めているようであった。

「私は彼女に私の結論 [第二の夢の解釈] を伝えたが、その印象は異論ないものようであった。というのはただちに忘れていた夢の断片を思いだしたからである。」<sup>19</sup>

それに引き続いて、K 氏を愛しているという解釈にも反論しなくなった。

「「あなたも承知しているように、K 氏に対するあなたの愛情はあの [湖畔で K 氏に告白され、それを拒絶した] 出来事で終わったわけではなく、私が主張したように——もちろん無意識のなかにはあるけれども——今日までつづいていたのです」——彼女ももはやそれには反論しなくなった。」<sup>20</sup>

さらに、K 氏に求婚を取り消され誹謗される結果になったことはひどい幻滅だったに違いない、K 氏の求婚は真剣なもので彼と結婚するまで彼は見捨てないだろうと想像したことを思いだしたくないのだ、とフロイトは指摘した。

「ドラは私のいうことに耳を傾け、いつものようには反論しなかった。彼女は感動したように見え、愛くるしく心のこもった新年の挨拶を述べて別れを告げ——ふ

---

<sup>17</sup> 前掲書 p 3 2 4

<sup>18</sup> 前掲書 p 3 2 5

<sup>19</sup> 前掲書 p 3 4 9

<sup>20</sup> 前掲書 p 3 5 2

たたびくることはなかった。」<sup>21</sup>

このように、K氏を愛していたことを認めたように思われる。その周辺には父とK夫人の関係など、ややこしいことがいろいろあった。彼女は、突然治療の終結を言い渡した。まだ分析されていない部分もある。フロイトは転移を扱いきれていなかったと後に回想している。

## 5. ハンス少年

ハンスは4歳9ヶ月のときに馬に噛まれそうだという恐怖症と母親と離れることに対する過度の不安が見られるようになったので、フロイトの信奉者であった父親が精神分析的治療を行った。まず、フロイトに言われて、ハンスの不安は、ハンスはママが大好きで、馬のおちんちんにとっても興味を持っていたから馬を恐がるようになったのだということと、自分のおちんちんのことをもそんなに気にするのはいいことじゃないと説明した。

「説明のあと、以前より落ち着いた時期がつづく。ハンスはとくに難儀もせず、毎日市立公園へ散歩に行くのに同意する。馬に対する恐怖は、馬を眺めるという強迫へとしだいに変わっていく。彼はいう。『ぼくは馬を見ないではいられないんだ。そうすると恐くなるんだ』」<sup>22</sup>

しかし、この一時的な回復は完全ではなかったと後で父親は記している。次の病気のせいだという説明は認めていないが、自慰の習慣に病因を求めている点では一致している。

「彼『[身体的な病気のせいだという父親の解釈に対して] ちがうってば。こんなに恐がっているのは、僕がいつもおちんちんに手をやるからなんだよ、毎晩』」<sup>23</sup>

他の大きい動物も恐怖する。キリンの幻想などの対話を材料としてフロイトは、ハンスはママが好きだからパパを恐がっているが、それでもパパはハンスのことが好きだという解釈する。その解釈を受けてハンスは次のように言った。

---

<sup>21</sup> 前掲書 p 356

<sup>22</sup> フロイト、S 「ある五歳男児の恐怖症分析」 1909（懸田克躬、高橋義孝 他訳 『フロイト著作集5』 人文書院 1969 p 189）

<sup>23</sup> 前掲書 p 190

「あの先生は神さまと話をするから、あんなことがみんな前からわかるの？」<sup>24</sup>

これはフロイトの解釈に納得したと受け取ってよいだろう。ここから本物の回復が見られる。そして父親に対する敵対感情は外側からも見られるようになった。

「この新しい一節（父親に対する敵対感情）は、彼が自分はママが大好きだからといって私が怒りはしないということが彼にわかってのちにはじめて現れることができた」<sup>25</sup>

父親であるところの馬が噛むという解釈を遊戯で認める。

「ハンスはこのところ、馬遊びをし、走り廻り、倒れ、脚でばたばたし、いなく。一度、小さな袋を馬糧囊のようにまきつけたことがある。繰り返し、彼は私めがけて駆けてきては、私を噛む」

彼はこうしてききほどの解釈を、彼が言葉でなしえたよりももっと決定的に容認しているのである。」<sup>26</sup>

ハンスは図々しく父親に反抗するようになった。妹のハンナが死ねばいいとも口にするようになった。父親が嫌いだと暗示するかのように馬を倒したりもする。そして父親が死ねば自分が父親になれるという願望をはっきりと言葉にする。

私 [ハンスの父親] 『グムンデンではよくママのベッドの中にいたね？』

ハンス 『うん』

私 『それでそのとき自分はパパだと思った？』

ハンス 『うん』

私 『そしてそのときお前はパパが恐かった？』

ハンス 『パパはなんでも知ってるね。ぼくはなんにも知らなかつたよ』

私 『フリッツルが倒れたとき、お前はパパがこんなふう倒ればいいのにと考えたし、小羊がお前に突きかかったときには、パパを突けばいいのにと考えたんだね。グムンデンのお葬式のことをおぼえている？』（ハンスの見た最初の埋葬。彼はしばしばそのことを思い出す。明々白々たる隠蔽記憶である）

ハンス 『うん。そのときどうだったの？』

私 『そのときお前は、もしパパが死んでくれれば自分がパパになれるのに、と考

---

<sup>24</sup> 前掲書 p 199

<sup>25</sup> 前掲書 p 201

<sup>26</sup> 前掲書 p 206

えたね』

ハンス『うん』」<sup>27</sup>

これより不安はほとんど消えた。自分が父親になって、父親は祖父になって…と父親を一段階繰り上げる空想や、工事夫が来て大きなお尻を取り替える空想などをする。

また、回復した後に当時のことを振り返って次のように言っている。

「『そりゃ、ぼくパパが馬のことを知っていたので、これもパパは知ってるんだと思ったんだ』 [中略] 『ぼくがばかなことにかかっていた、あの頃』」<sup>28</sup>

ハンスは父親が死ねばいいという無意識を認めた。また、そのせいで父親がハンスを迫害することはないという現実の状況を認めた。よって治療が起こったと考えられる。

## 6. 鼠男

鼠男は大学教育を受けた青年で、非常に愛している二人の人物に何か起こらないかという強迫観念や、剃刀で自分の喉頭を切りはしないかという強迫衝動を主訴として治療にやってきました。軍の演習中に立て替えてもらった金を本当は立て替えていない人に返さないといけないという不可能な強迫衝動がきっかけとなって治療にきた。もっぱら自由連想法で治療された。

強く否定するということは父が死ねばいいという願望があるのではないかと気づかされたが、それを認めるまでは至らなかった。

「[父が死ねばいいという願望があるのではないかと論理的に説明され] 彼は非常にびっくりしたが、自分の矛盾を棄てようとはしなかった。」<sup>29</sup>

さらに詳しい説明も表面上は認めたが、自分のこととして信じたわけではなかった。

「彼は、この私の[父が死ねば結婚できるくらいの財産が手に入るという考えや、愛情と憎悪は同時に存在するという]説明が全部当たっていると一応は認めたが、もちろんそれを少しも信じたわけではなかった。」<sup>30</sup>

---

<sup>27</sup> 前掲書 p 236

<sup>28</sup> 前掲書 p 243

<sup>29</sup> フロイト、S 「強迫神経症の一症例に関する考察」 1909 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p 230)

<sup>30</sup> 前掲書 p 232

そこには次のような注がつけられてある。

「以上のような話し合いの目的は、患者に分析医の説明の内容を信じ込ませることにあるのではない。むしろそれは、抑圧されたコンプレックスを意識化させ、意識的な精神活動によって、この無意識だったコンプレックスをめぐる闘いを解決し、無意識から新しい材料が浮かび上りやすいように操作することにある。再び獲得された材料が患者によって十二分に理解された後、初めて本当の確信が生まれるのである。患者のこのような確信がぐらついている間は、材料が出つくしたと考えてはならない。」

31

次の分析時にも彼は同じテーマを取り上げて、間接的に父に背くような願望を認める。

「彼は、自分がこれまで父に背くような願望を抱いたとはどうしても思えないというのである。同時に彼は、自分が深い印象を受けたことのあるゾーデルマンのある短篇小説を思い出した。その小説では、ある夫人の病床につきそった彼女の妹が、姉の夫と結婚したいために姉の死を願っていることを心中に感ずるのである。けっきょく彼女は、こんな卑しい気持ちをもった自分はこれ以上生きてゆく値打ちがないと思って自殺してしまう。彼は「自分には彼女の心境がよく理解できるし、もし自分が自分の考えにひきずりまわされて、このまま滅びてゆくとしても、それは仕方のないことです。どっちみち自分は何の値打ちもないものなのですから」と語った。」<sup>32</sup>

分析が進むに連れて、自分の昔からの恋人に忠実でいるべきか、父のように金持ちの親戚の娘と結婚するかを解決しなければならないという状況が浮かび上がってきた。しかし、彼はそれを認めようとはしなかった。

「もちろんこのような私の〔自分の昔からの恋人に忠実でいるべきか、父のように金持ちの親戚の娘と結婚するかを解決しなければならないという状況を発病によって回避したという〕説明をはじめのうち患者は受け入れなかった。自分には母の打ち明けた結婚計画がそんな結果を生んだとはとても考えられない、それを聞いた当時自分は、別に何とも思わなかった、と彼は語った。しかし分析治療が進むにつれて、彼も自分なりの特殊なやり方で、私の推定のただしさを確信せざるを得なくなった。すなわち、彼は、転移空想の助けをかりて、自分が忘れていた過去のこと、あるいはただ無意識にとどまっていたことを、新しいこと、現在のこととして体験するようになっ

---

<sup>31</sup> 前掲書 p 233、234

<sup>32</sup> 前掲書 p 234

た。」<sup>33</sup>

転移を通してその状況を認めるようになった。

「彼は、[金持ちのフロイトが自分の娘と結婚させたいと思っているという] 空想的な転移と、当時の現実状況とのあいだの完全な類似性という、どうしても信じざるを得ないような事実をもはや否定することができなくなった。」<sup>34</sup>

さらに分析が深まり、鼠譚妄は父親に服従しようかしまいか、恋人に忠実でいようかしまいかという葛藤を一度に表現しているという解釈などが与えられる。そして分析は終了した。

「ここでわれわれが説明したような解決方法によって、鼠譚妄は消失したのである。」

35

以上のように、いろいろな形で現れた恋人を選ぶか父を選ぶかという葛藤、あるいは同一人物内での愛情と憎悪の葛藤を認めることで症状は回復した。

### Ⅲ. フロイトの治療論のまとめ

次にフロイトの治療論を見てゆく。様々な言い方で精神分析治療を記述しているが、大きく分けると3つに分類できる。

#### 1. 記述的——無意識を意識化する

フロイトは治療を催眠によって始めた。

「したがってたいはいは患者に催眠術をかけ、症状が最初にあらわれたときの記憶を催眠状態のもとで呼びさますことが必要なのである。」<sup>36</sup>

---

<sup>33</sup> 前掲書 p 246

<sup>34</sup> 前掲書 p 247

<sup>35</sup> 前掲書 p 261

<sup>36</sup> フロイト、S 「ヒステリー研究」 1895 (懸田克躬、小此木啓吾訳 『フロイト著作集7』 人文書院 1974 p 9)

ヒステリーの原因を外傷体験に求める。

「いとも様々な症状つまりヒステリーの自生的、いわば特発的作用によるものだとみなされているものが、誘因となる外傷とのつびきならぬ関係にあるということは、上述のその点では疑う余地のない諸現象 [外傷性ヒステリーや発作のたびごとに同じ事象の幻覚が繰り返されるヒステリー] となんら変わるころはないということであつた。」<sup>37</sup>

そしてその外傷体験を感動とともに意識化すれば症状はなくなると考えられた。

「誘因となる事象の回想を完全な明白さで呼びおこして、それによつてこれに随伴していた感動をも呼びさますことに成功し、そのうえで患者が自らその事象をできるだけ精細に述べてその感動に言葉を与えるようにすれば個々のヒステリー症状はたちどころに消滅し二度とは起こるものではない」<sup>38</sup>

「感動の伴わない回想はたいていぜんぜん効果がない。」<sup>39</sup>

ヒステリー研究の症例はこのようにして治療された。その後技法面では、催眠術にかからない患者がいるという直接の理由などからフロイトは催眠術を放棄し自由連想法を編み出した。それでも理論面ではあまり変化はなく、外傷となっている体験や葛藤を自由連想を通して意識化すれば治療は達成されるとされている。

「こういう事態にあつては通例、神経症患者の病因的葛藤を、それと同一の心理的な地盤の上に立っている心的諸欲動の正常な葛藤と混同してはならないという一つの本質的な点が見のがされているのです。それは、前意識と意識の段階までもちきたらされた力と、無意識の段階にとめおかれた力との間の抗争なのです。ですからこの葛藤には決着がつけられないのです。たがいに争っているのは [原文ママ]、あの有名な白熊と鯨との闘いの例のように、たがいに相まみえる機会がないのです。両者が同じ土俵上でぶつかり合つてこそ、はじめて真に決着がつけられるのです。このぶつかり合いができるようにするというのが治療の唯一の課題であると私は考えるのです。」

40

---

<sup>37</sup> 前掲書 p 10

<sup>38</sup> 前掲書 p 12

<sup>39</sup> 前掲書 p 12

<sup>40</sup> フロイト、S 「精神分析入門」 1916-17 (懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイ

## 2. 経済論的——リビドーを現実へ振り向ける

神経症は現実の生活から引き離すと述べられている。

「どの神経症も結局のところ患者を現実の生活からおしだし、現実にたいして疎遠にすることを——したがって本来その傾向をもっているらしいことを——われわれはずっと前から気づいていた。」<sup>41</sup>

また、逆に現実から離れようとする傾向が神経症の素因となるとも述べている。

「それゆえ、神経症にかたむく心理的素因の本質的な部分は、現実に留意するように性欲動を「しつける」のが遅れたことと、それから、このおくれを生じさせる条件とによってつくられる。」<sup>42</sup>

どちらが先なのかはわからないが、ともかく神経症と現実から離れることは密接に関連しており、子供を教育してそうさせるように、現実をわからせなければならないとされる。

「医師は患者にたいして、すべての快感をではなく、それにならず害がつきまとうような種類の願望充足だけを断念しろとっているのである。それもたんに一時のことである。そして、直接的な快感の獲得を、たとえそれを得るためには時間がかかるにしても、しかしもっと安全な快感にとり換えることを学びさえすればいいのである。いいかえれば、患者は医師の指導下に、成人を子供から区別するところの、あの快感原則から現実原則へと進歩してゆかねばならないのである。」<sup>43</sup>

そして症状とは現実によって拒否された満足の代理であるとしている。

「すなわち人間はそのリビドーを満足させる可能性を奪われると、つまり私の表現によれば、「拒否」にあうと、そのために神経症になるということです。そして、そ

---

ト著作集1』 人文書院 1971 p357)

<sup>41</sup> フロイト、S 「精神現象の二原則に関する定式」 1911 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p36)

<sup>42</sup> 前掲書 p39

<sup>43</sup> フロイト、S 「精神分析的研究からみた二、三の性格類型」 1916 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p115)



の症状はとりもなおさず、拒否された満足の代理であるということです。」<sup>44</sup>

「症状とは、拒否という事実によってやむをえないものとなった新しい満足、すなわち代償満足なのです。」<sup>45</sup>

自我が現実を検討するのだとすると、現実による満足の拒否を、自我と性欲との葛藤とすることもできるだろう。

「神経症は性欲から生ずるのではなく、自我と性欲との間に起る葛藤にその根源があるということを、あらゆる反論に抗して精神分析は主張しているのです。」<sup>46</sup>

現実から離れるということは量的な問題なので、質的には誰もが神経症であると言える。多少現実から離れていても、現実に対して動員できるエネルギーがある程度残っていたらそれは正常だとみなされるということになる。

「こういう [生活課題に対して活動する余力を奪ってしまう] 結果になるかどうかは、主として、このようにして要求されるエネルギーの量の如何によりますから、「病気である」ということは、本質的に実用的な概念であることをみなさんも容易に認識されるでしょう。ところが、理論的な立場に立って、この量を度外視すれば、われわれはみな病気である、すなわち神経症にかかっている、なぜなら、症状形成の諸条件は正常者においても指摘できるのだからと容易に言うことができるのです。」<sup>47</sup>

よって代償満足である症状を消失させる治療は、現実から離れさせるようになった葛藤をよみがえらせて、別の解決を見つけることである。ただその時の記憶を想起するだけでは不十分で、分析家との転移を通して行う。

「われわれは今、治癒の機制についてお話ししたことをリビドー論的に定式化して、これを完璧なものにしましょう。神経症患者は楽しみを味わうことも仕事をするともできませんが、彼が楽しみを味わうことができないのは、そのリビドーがいかなる現実的対象にも向けられていないからですし、彼が仕事をすることができないのは、リビドーを抑圧したままに保ち、その暴走を防ぐためにその他のエネルギーを非常に

---

<sup>44</sup> フロイト、S 「精神分析入門」 1916-17 (懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイト著作集1』 人文書院 1971 p284)

<sup>45</sup> 前掲書 p289

<sup>46</sup> 前掲書 p290

<sup>47</sup> 前掲書 p296

たくさん消費しなければならないからです。神経症患者は、自我とリビドーとの間の葛藤が終結して、自我がふたたびリビドーを思いのままに使用できるようになれば健康になるでしょう。それゆえ治療の課題は、その時々、リビドーを自我から引き離している束縛からリビドーを解放して、そのリビドーをふたたび自我が使用できるようにしてやるという点にあります。ところで神経症患者のリビドーはどこに隠れひそんでいるのでしょうか。それを見つけ出すことは容易です。リビドーは、その時々、ただ一つの可能な代償満足をあたえてくれる症状に結びついているのです。したがって症状を制圧し、これを解消させなければなりません。これこそまさに患者がわれわれに求めているものなのです。症状を解消させるには、症状の発生したところまでさかのぼり、症状を生ぜしめた葛藤をよみがえらせ、当時は自由に使えなかったそういう欲動の力の助けをかりて、葛藤を別の結末にもって行く必要があります。このような抑圧過程の吟味が、抑圧を招くにいたった諸過程の記憶の痕跡にたよって行われても、それは部分的にしか成功しません。この作業の決定的な部分は、患者の医師に対する関係、すなわち「感情転移」の中で、昔の葛藤の新版をつくりあげることによって成しとげられるのです。患者は、この葛藤の中で、その昔ふるまったと同じようにふるまいたいのですが、医師の方では、患者の自由になるすべての心的エネルギーを動員して、以前の場合とは別な決断をするようにさせて行きます。つまり感情転移は、たがいに戦い合うすべての力がそこで必ず遭遇する戦場となるわけです。」<sup>48</sup>

現実から離れるという作戦は無力な子供時代にはやむを得ないものであったが、大人になって状況が変わってもそれに固執している人を神経症と呼ぶ。

「その事実というのは、非常に多くの人が、危険にたいする態度では子供のままであり、年をへた不安条件を克服できないということである。こういう人をまさに神経症とよぶのであるから、この事実をうたがうと、神経症の事実を否定することになる。」

49

ただ、積極的に現実に適応すべきだとまでは言っていないく、どちらかといえば現実を正しく認識することに主眼がおかれているように思われる。

### 3. 力動的——転移を通して抵抗を克服する

---

<sup>48</sup> 前掲書 p 375

<sup>49</sup> フロイト、S 「制止、症状、不安」 1926 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p 361)

力動的、あるいは方法論的には、無意識を意識化するためには抵抗を克服しなければならないということに力点が置かれるようになる。

「精神分析の方法が解決しようと努力している課題を、さまざまな公式の形で言い表すことができるが、それらの公式は、結局その本質からいえばみな等しいものということができよう。そして、この療法の課題は健忘を解決することだ、と言うこともできるかもしれない。すべての記憶の空隙がみだされ、精神生活中の謎めいた因果関係が解明されてしまえば、病苦がそれ以上持続することは不可能になるし、もちろん病苦が再発する可能性も消滅する。あるいはこの事情を別な公式で理解することもできる。すなわちそれは、すべての抑圧形成の過程を逆行させるということである。そしてこのような抑圧の解決が完全に行なわれた場合の精神状態は、すべての健忘が解決されている状態ということになる。もう一つさらに重要な考え方がある。つまり、無意識的な存在と意識とを疎通させることである。これが行なわれるのはさまざまな抵抗を克服することによってである。」<sup>50</sup>

「無意識的なものを明るみに出して意識的なものに置き換えるときには、常に患者の側からの抵抗が起って来ます。このような無意識的なものを浮び上らせることには不快が結びついています。そしてこの不快のために、無意識的なものの浮揚が患者に拒絶されることになるのです。このようにして皆さんは患者の精神生活の中に活動している葛藤を把握なさるのであります。患者がこれまで行なってきた自動的な不快支配の結果拒否し（抑圧し）てきたもの（無意識的なもの）を、（意識化して）もっとよく洞察しようという動機にはげまされて、（抵抗を克服し）抑圧されたものを意識的に受け容れるようにそのような患者の変化に成功すれば、それで皆さんは患者のために若干の教育の仕事を果たしたということになるのであります。朝早く寝床から離れようとしないう人を早起きするようにさせられるのも、すでに教育であります。つまり皆さんは精神分析療法をこのような「内的抵抗を克服するための成人教育」として全体的に把握することができます。」<sup>51</sup>

「意識的な思考過程がこの局所〔無意識〕にまで拡大されて、抑圧抵抗 *Verdrängungswiderstände* が克服されたときに、はじめて一定の精神的変化が起こる。」<sup>52</sup>

---

<sup>50</sup> フロイト、S 「フロイトの精神分析の方法」 1904（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p10、11）

<sup>51</sup> フロイト、S 「精神療法について」 1904（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p22、23）

<sup>52</sup> フロイト、S 「分析治療の開始について」 1913（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p106）

「もちろん、これらの技法の目標はすべてを通じて変わっていない。それを記述的にいえば、記憶の間隙をみたすことであり、力動的に言えば、抑圧抵抗 *Verdrängungswiderstand* の克服ということである。」<sup>53</sup>

そして転移に注目される。

「われわれが患者に意識的な期待観念 *bewusste Erwartungsvorstellung* を与えると、患者はそれとの類似をたどって、無意識的な抑圧された観念を自分の内部に見つけ出します。これが知的助力で、この助力は患者が意識と無意識のあいだに存在する抵抗の克服 *Überwindung der Widerstände* を容易にするのであります。ついでに申しそえますが、これは分析療法において用いられる機制のすべてではありません。どなたもこれよりはるかに強力な機制、「転移」*Übertragung* の活用によって成立する機制を知っておられるでしょう。」<sup>54</sup>

転移は、一つには患者を治療につなぎとめる動機の役割を果たすとされている。

「患者は一種の無知の結果悩んでいるのであるから（患者の生活と病気の因果関係、患者の幼児期体験などを）話してきかせることで、その無知を取り除いてやるならば、患者は健康になるはずであるという考え方は、今日ではとくに克服されてしまった。それはただ表面に固執するだけの考え方なのである。この無知ということ自体が病気の契機なのではなく、この無知を最初に呼び出し、さらに現在もなおそれを保持している内的抵抗 *innerer Widerstand* の中に、この無知の基礎が置かれている、という事実こそ病気の契機なのである。この抵抗と戦って、それを克服することが治療上の課題である。〔中略〕しかし、精神分析療法ではそんな風に話してきかせないわけにはいかないから、一定の技法原則を設けて、二つの条件が満たされるまではそれを行なってはならないと定めている。それは、第一に、患者の方に抑圧されたものの身近に接近する準備ができるまで、また第二には、患者が医者に対して非常な愛着を感じるようになり（転移 *Übertragung*）、この医者に対する感情関係のために患者が治療から逃げ出すことができないようにしてしまうまでである。」<sup>55</sup>

---

<sup>53</sup> フロイト、S 「想起、反復、徹底操作」 1914（井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p50）

<sup>54</sup> フロイト、S 「精神分析療法の今後の可能性」 1910（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p45）

<sup>55</sup> フロイト、S 「「乱暴な」分析について」 1910（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p59、60）

「それ〔解釈〕は一定の実質的な活動力をもった転移、本格的な（分析医・被分析者間の）交流が患者につくり出される以前に行なってはならない、と。分析操作の第一の目的は、あくまでも患者を治療に、そして分析医の人格に執着させることにある。」

56

「この〔分析によって抵抗が暴露されて生じた正常な葛藤の〕戦いで最後の決着をつけるのは、患者の知的な洞察ではなく——知的な洞察は、このような働きをするにたるほどの力もなければ自由ももたないのです——唯ただ患者の医師に対する関係〔陽性転移〕だけなのです。」<sup>57</sup>

抵抗の克服は解釈の投与から始める。

「抵抗の克服はいかにすべきかということ、これは周知のように、分析医が被分析者の全然知らないでいる抵抗を発見してそれを話してきかせるということ（解釈の投与）から開始すべきである。」<sup>58</sup>

「ところで、患者の報告や思い浮かべた考えが停滞することなく次々と連想されてくる限り、われわれは転移という問題には触れないでいなければならない。われわれはこれらのすべての手続きの中での最も微妙で難しい技法を用いて、転移が抵抗となるまで待たなければならない。」<sup>59</sup>

しかし、抵抗を解釈し、話して伝えても直接治療にはならない。分析を進める効果はある。

「医師が自分の知識を話して伝えても、それはなんの効果をも示さないのです。いや、そういうふうに言うのは正しくないでしょう。それには症状を取り除くという効果はないが、分析を進めさせるという別の効果はあるのです。」<sup>60</sup>

---

<sup>56</sup> フロイト、S 「分析治療の開始について」 1913（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p103）

<sup>57</sup> フロイト、S 「精神分析入門」 1916-17（懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイト著作集1』 人文書院 1971 p367、368）

<sup>58</sup> フロイト、S 「想起、反復、徹底操作」 1914（井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p57）

<sup>59</sup> フロイト、S 「分析治療の開始について」 1913（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p103）

<sup>60</sup> フロイト、S 「精神分析入門」 1916-17（懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイト著作集1』 人文書院 1971 p232）

一方、患者は症状を反復する。

「被分析者は記憶を想起するかわりに反復行為を行なう、抵抗の諸条件によって支配されて反復を行なう、ということを知った。そこで今度は、いったい彼は何を反復するのかあるいは行為するのか、と尋ねることがゆるされよう。その答はこうである——彼は抑圧されているものを源泉とし、その中から発して、すでに明らかに彼の本質の中に浸透しているもののすべて、彼が抑圧していたもの、実現しえないでいたさまざまな精神的態度、病的な性格特性などを反復するのである。いや、実際のところ、彼は分析治療のあいだに、症状のすべてを反復するのである。」<sup>61</sup>

反復を転移の場に導入し、それを通じて症状を解消する。

「われわれは今や患者に知られるにいたった抵抗をさらに熟知させるために、その抵抗を徹底操作し、*durcharbeiten*、抵抗に逆らって精神分析の基本規則による操作（自由連想法）を続けながらそれを克服するためには、患者に時を与えなければならない。そのような徹底操作が頂点に達したとき、はじめてわれわれは被分析者との共同作業によって、抵抗の源泉となっている抑圧された本能興奮、患者がそのような徹底操作の体験を通じてその存在と力とを確信するような本能興奮を発見するのである。」<sup>62</sup>

「これらの抵抗〔転移〕は、患者の過去の生活の非常にたいせつな材料をたくさん含んでおり、それをいかにも納得の行くように再現しますので、技法に熟練していてこれを正しく活用することを心得ていれば、それらは分析の最良の手がかりになるのです。」<sup>63</sup>

見えにくい無意識の願望、複雑な現実の状況を転移で扱いわかりやすくするのである。

「分析医は被分析者に対して不透明な存在でなければならない。鏡面のように、その前に示されたものだけを写す〔原文ママ〕ものでなければならない。」<sup>64</sup>

---

<sup>61</sup> フロイト、S 「想起、反復、徹底操作」 1914（井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p53）

<sup>62</sup> 前掲書 p57

<sup>63</sup> フロイト、S 「精神分析入門」 1916-17（懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイト著作集1』 人文書院 1971 p240）

<sup>64</sup> フロイト、S 「分析医に対する分析治療上の注意」 1912（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p85）

「われわれは、人間というものは損害を受けたり自分自身の経験を通じたりしてのみ賢明になることができるものだ、ということをおぼれるものではない。」<sup>65</sup>

「しかし、あることを自分から知っているというのと、その同じことを他人からきくというのとは同じことではない。医師がひき受けるのは、この効果的な第三者の役割である。」<sup>66</sup>

無意識を意識化するために、現実の状況を正しく認識するためには、転移を通じた作業が必要である。

「転移の強烈さを、抵抗克服のために活用するときのみ、その治療法は精神分析療法の名に値するものになる。このような場合にのみ転移の本来の役割がそれを望むように、たとえ転移が解消されても、病的状態が再発する可能性はなくなるのである。」

67

「われわれは、自分たちの分析医としての仕事は、神経症患者の内部にある無意識的な、抑圧された感情を患者に教え知らせること、そしてこの目的のために、自己自身についての知識が、このように拡大されることに反対する彼の内部にある抵抗を発見することである、と定義した。しかし、この抵抗を発見しさえすれば、それと同時に、はたして抵抗の克服も保証されるのであろうか。たしかに、必ずしも何時もそうであるということとはできない。しかし、われわれは、分析医個人に対する患者の転移を利用して、幼児期に成立した抑圧過程の不適切さ、もっぱら快感原則を追い求める生活の不可能さに関する（現実原則に基づいた）われわれの確信を患者にも確信させることによって、その目標に到達できると期待している。」<sup>68</sup>

#### IV. 考察

---

<sup>65</sup> フロイト、S 「想起、反復、徹底操作」 1914（井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p55、56）

<sup>66</sup> フロイト、S 「精神分析的研究からみた二、三の性格類型」 1916（井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970 p115）

<sup>67</sup> フロイト、S 「分析治療の開始について」 1913（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p106、107）

<sup>68</sup> フロイト、S 「精神分析療法の道」 1918（小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983 p127、128）

## 1. 納得という語の辞書的な定義

今まで特に定義することなく納得という語を用いてきたが、この論文ではこの納得という語を通してフロイトの治療論を再検討するのが目的なので、まずこの語の意味するところを確認する必要がある。日本国語大辞典には次のように書かれている。

なっ - とく【納得】

①他人の考え、行動などを理解して受け入れること。わかってのみこむこと。理解して肯定すること。承知。同意。

②⇒のうとく（納得）<sup>69</sup>

のうとくという語が出てきたので同じく日本国語大辞典で調べた。

のう - とく【納得】

①仏語。他物を受け入れて自己のものにすること。

②⇒なっとく（納得）<sup>70</sup>

日常的に使用する意味と大差はないが、他人<sup>レ</sup>のという部分に意外な印象を受ける。文字通りに受け止めると自分の行動などに対しては納得という語は用いられないということになる。では納得という語を自分の行動などに対して用いる場合はどのように考えればよいのだろうか。

第一に、絶対的に確立された唯一の主体があるのではなく、解離性障害で典型的に見られるように、通常の意識では把握しきれない部分もあるのだと精神分析的に考えればこの矛盾を解決できる。局所論的には、意識が無意識に由来する、あるいは自我がエスや超自我に由来する行動などを納得するということである。

第二に、他人の行動を納得することを通して、その効果を自分にも及ぼすと考えることができる。その際他人の行動の認識には自分の願望などが投影されていると認めることが前提となる。

どちらにせよ納得という語を自分の行動に対して使うことは精神分析的である。

## 2. フロイトの原文との対応

フロイトの原文において、本論文でいう「納得」に相応する語を探す。手始めに日本語

---

<sup>69</sup>日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編 『日本国語大辞典 第二版』小学館 2001

<sup>70</sup> 前掲書



で納得という語が用いられている部分を原文と照らし合わせる。以下の日本語とドイツ語を並べた引用中の下線部は対応がわかりやすいように筆者が加えたものである。

「これらの抵抗 [転移] は、患者の過去の生活の非常にたいせつな材料をたくさん含んでおり、それをいかにも納得の行くように再現しますので、技法に熟練してこれを正しく活用することを心得ていれば、それらは分析の最良の手がかりになるのです。」<sup>71</sup>

「Sie enthalten so viel von dem wichtigsten Material aus der Vergangenheit des Kranken und bringen es in so überzeugender Art wieder, daß sie zu den besten Stützen der Analyse werden, wenn eine geschickte Technik es versteht, ihnen die richtige Wendung zu geben.」<sup>72</sup>

このように“überzeugen”という語が使われている。派生語も含めて辞書で確認する。

#### über-zeu-gen

(…に…を) 納得<承服>させる、得心させる、なるほどと思わせる；(…を…のことで) 納得させる

#### über-zeu-gend

納得のゆく、説得力のある、うなずかせる、確かな

#### über-zeugt

確信のある、確信している、信じて疑わない

#### Über-zeu-gung

確信、信念、信条、主義<sup>73</sup>

この意味も参考にしながら他の箇所でも“überzeugen”という語が使われている部分を抜き出す。

「以上のような話し合いの目的は、患者に分析医の説明の内容を信じ込ませることにあるのではない。[中略] 再び獲得された材料が患者によって十二分に理解された

<sup>71</sup> 本論文 p 20 を参照

<sup>72</sup> Freud, S. “Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse” 1916 – 17 G. W. XI p 300、301

<sup>73</sup> 国松孝二編 『小学館 独和大辞典』 小学館 1985

後、初めて本当の確信が生まれるのである。患者のこのような確信がぐらついている間は、材料が出つくしたと考えてはならない。」<sup>74</sup>

「Es ist niemals die Absicht solcher Diskussionen, Überzeugung hervorzurufen. [中略] Die Überzeugung stellt sich erst nach der Bearbeitung des wiedergewonnenen Materials durch den Kranken her, und solange sie [前の Überzeugung を指す] schwankend ist, darf man das Material als nicht erschöpft beurteilen.]」<sup>75</sup>

「しかし分析治療が進むにつれて、彼も自分なりの特殊なやり方で、私の推定のただしさを確信せざるを得なくなった。」<sup>76</sup>

「Im weiteren Verlaufe der Kur mußte er sich aber auf einem eigentümlichen Wege von der Richtigkeit meiner Vermutung überzeugen.」<sup>77</sup>

「そのような徹底操作が頂点に達したとき、はじめてわれわれは被分析者との共同作業によって、抵抗の源泉となっている抑圧された本能興奮、患者がそのような徹底操作の体験を通じてその存在と力とを確信するような本能興奮を発見するのである。」<sup>78</sup>

「Erst auf der Höhe desselben findet man dann in gemeinsamer Arbeit mit dem Analysierten die verdrängten Triebregungen auf, welche den Widerstand speisen und von deren Existenz und Mächtigkeit sich der Patient durch solches Erleben überzeugt.」<sup>79</sup>

「しかし、われわれは、分析医個人に対する患者の転移を利用して、幼児期に成立した抑圧過程の不適切さ、もっぱら快感原則を追い求める生活の不可能さに関する（現実原則に基づいた）われわれの確信を患者にも確信させることによって、その目標に到達できると期待している。」<sup>80</sup>

「aber wir hoffen, dieses Ziel zu erreichen, indem wir seine Übertragung auf die Person des Arztes ausnützen, um unsere Überzeugung von der Unzweckmäßigkeit

---

<sup>74</sup> 本論文の p 1 1 を参照

<sup>75</sup> Freud, S. “Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose” 1 9 0 9 G. W. VII p 4 0 4、4 0 5

<sup>76</sup> 本論分の p 1 2 を参照

<sup>77</sup> Freud, S. “Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose” 1 9 0 9 G. W. VII p 4 2 1

<sup>78</sup> 本論文の p 2 0 を参照

<sup>79</sup> Freud, S. “Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten” 1 9 1 4 G. W. X p 1 3 5、1 3 6

<sup>80</sup> 本論文の p 2 1、2 2 を参照

der in der Kindheit vorgefallenen Verdrängungsvorgänge und von der Undurchführbarkeit eines Lebens nach dem Lustprinzip zu der seinigen werden zu lassen.]<sup>81</sup>

このように日本語では「確信」や「信じ込ませる」となっている部分も原文では「納得」と同じ“überzeugen”となっている。本論文で提起した納得という概念はこれらをカバーする。

### 3. フロイトの症例研究に見られる納得、および精神分析治療論との関係

II. の症例研究で見てきたように、症状の消失や回復への変化が見られる際に患者の納得が起こっていると表現できるであろう。何を納得するのかというと、自分の無意識の願望と現実の状況の2点に大きく分けられる。

それぞれ例を挙げると、ミス・ルーシー・Rの社長さんへの愛情、ドラのK氏への愛情、ハンスの母親が好きだということ、鼠男の同一人物内での愛情と憎悪の葛藤などが無意識の願望であり、ミス・ルーシー・Rが社長さんを心の中で愛していてもそのために不幸にはならないということや、ハンスが母親のことが好きでも父親はハンスのことが好きだということが現実の状況である。

ミス・ルーシー・Rやハンスの例で明らかなように、このそれぞれはどちらかが先に起こるというよりも分析が進むにつれて並行して起こる。両方の納得を妨げる理由が何かあるに違いないからである。これがいわゆる抵抗である。ヒステリー研究ではただ外傷体験を想起する形で行われたが、後には転移を通して抵抗を克服するようになる。

III. で見てきたように、フロイトの治療論をまとめると、記述的には無意識を意識する、経済論的にはリビドーを現実へ振り向ける、力動的には転移を通して抵抗を克服する、と3つに分類できた。これは先ほどあげた2種類の納得とその方法に対応する。

無意識を意識化するということは無意識の願望などに由来する行動を納得すると言いかえられる。そうすることで具体的なイメージがつかみやすくなるのではないだろうか。

リビドーを現実に振り向けるということは現実の状況を納得すると言いかえられる。多少ニュアンスの違いはあるかもしれないが。

転移を通して抵抗を克服するのはそれらのための方法である。一つには治療を進める動機を促進する。そしてもう一つには、自分の無意識の願望や現実の状況を、分析という安全な場でわかりやすく再現して、納得しやすくするという役割を果たす。想起するだけでも納得は起こりうるが、転移はより強力な方法である。

---

<sup>81</sup> Freud, S. “Wege der psychoanalytischen Therapie” 1918 G. W. XII p 184

#### 4. ラカン理論への展望

ここまでフロイトに依拠ながら納得について論じてきたが、最後にラカン理論への展望を少し示したい。

ラカンは想像的なものと象徴的なものを区別して自我について考えるためにシェーマLを導入した（下図参照）。そこで次のように述べている。

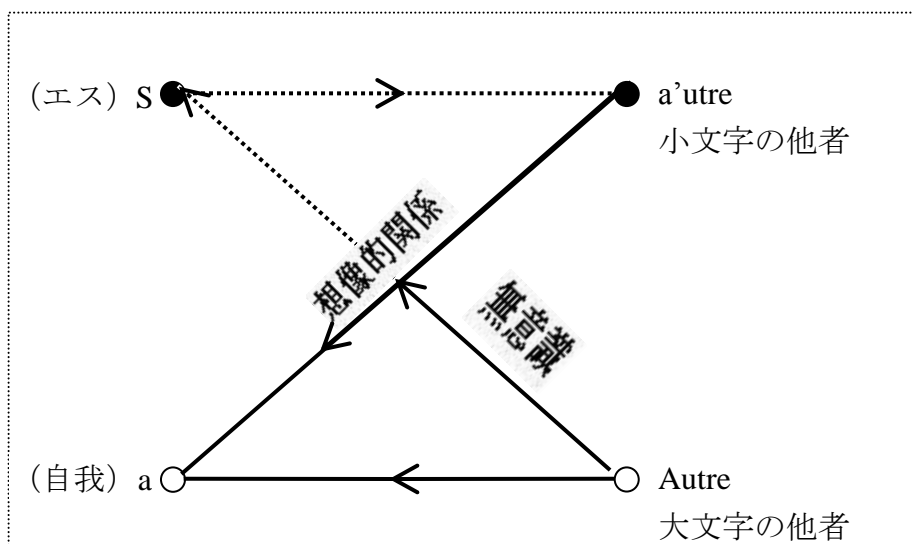


図 シェーマL<sup>82</sup>

「分析家の自我がそこになくという条件があればそれだけで、つまり分析家が生きた鏡ではなく、空っぽの鏡であろうとしているという条件があればそれだけで、分析の経過のすべてにおいて、起きるべきことが、主体の自我と他者たちの間で——外見上、しゃべっているのはいつも主体の自我の方ですが——起こります。分析の進展はすべて、主体が、ランガージュの壁の向こう側に転移としてとらえることのできるこの関係の漸進的な移動です。転移は主体に由来するものでありながら、主体はその中であって己を見いだすことができません。この関係は、よく言われるように解消すべきものなどではありません。主体がこの関係を主体の場所で受け入れることが大切なのです。分析とは、主体をしてこの関係、分析家の自我とではなくこの他者Aたちとの関係、彼の知らなかった、真の解答者であるこの他者Aたちとの関係を意識させることにあります。それは主体が次第に、自分が知らないままに本当ほどの他者Aを目指していたのかを発見することです。そして、主体が次第に転移の関係を自分のいる場所において、しかしながら始めは自分がそこにいるとは知らなかった場所にお

<sup>82</sup> ラカン、J述、J-A・ミレール編、小出浩之 他訳 『フロイト理論と精神分析技法における自我（下）』 岩波書店 1998 p 118

いて、引き受けるということです。」<sup>83</sup>

大文字の他者Aとは、人は話すことにおいて嘘をつくことができるという証拠から想定される象徴的な真の他者であり、普段は近づくことができない。精神分析では、主体が転移を通して大文字の他者Aとの関係を引き受けることが目指されるとされている。先に見たように納得という語は「他人の考え、行動などを理解して受け入れること」という意味であるので、精神分析の目指すところは、大文字の他者AとSとの関係について納得することであると一言換えられるだろう。シェーマLではA—Sの軸に相当する。本論文では納得を2種類に分けたが、自己の無意識に由来する願望などを納得するというのはSを、現実の状況を納得するというのはAを強調しているのだと考えられる。

ラカンはその前に、精神分析の目標は分析家の自我を取り入れて主体を統合することであるという考え方を退ける。シェーマLではa'—aの軸に相当する、小文字の他者a'を取り入れて自我を構成するという想像的關係である。例えばある宗教で、指導者の強烈な影響下で納得するということは、この小文字の他者a'について納得することなのではなかろうか。これは精神分析治療の目指すところではない。

## V. おわりに

以上、精神分析の治癒過程では、自己の無意識の願望などに由来する行動と取り巻かれている現実の状況に対する納得が起こることを示し、それらのフロイト精神分析治療論との対応を考えた。逆に納得が起これば治癒に到達するかどうかは問うていない。それでも納得という現象が外から容易に観察されるなら、分析の進み具合を測る助けになるだろう。

それらの納得は転移を通して起こるとは述べたが詳しい機制には触れていない。実際に臨床を行う際には技法等についてさらなる考察が求められる。また、納得と関連して精神障害の種類についても何か言えるかも知れない。

それらの問題について考える上でも他の治療論を参照することが今後求められる。

---

<sup>83</sup> 前掲書 p 123、124



## 参考文献

- <フロイト、S> (G. W. :Gesammelte Werke. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main.)
- 「分析治療の開始について」 1913 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「ヒステリー研究」 1895 (懸田克躬、小此木啓吾訳 『フロイト著作集7』 人文書院 1974)
- 「あるヒステリー患者の分析の断片」 1905 (懸田克躬、高橋義孝 他訳 『フロイト著作集5』 人文書院 1969)
- 「ある五歳男児の恐怖症分析」 1909 (懸田克躬、高橋義孝 他訳 『フロイト著作集5』 人文書院 1969)
- 「強迫神経症の一症例に関する考察」 1909 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「精神分析入門」 1916-17 (懸田克躬、高橋義孝訳 『フロイト著作集1』 人文書院 1971)
- 「精神現象の二原則に関する定式」 1911 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970)
- 「精神分析的研究からみた二、三の性格類型」 1916 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970)
- 「制止、症状、不安」 1926 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970)
- 「フロイトの精神分析の方法」 1904 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「精神療法について」 1904 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「想起、反復、徹底操作」 1914 (井村恒郎、小此木啓吾 他訳 『フロイト著作集6』 人文書院 1970)
- 「精神分析療法の今後の可能性」 1910 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「「乱暴な」分析について」 1910 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「分析医に対する分析治療上の注意」 1912 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- 「精神分析療法の道」 1918 (小此木啓吾訳 『フロイト著作集9』 人文書院 1983)
- “Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse” 1916-17 G. W. XI

“Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose” 1909 G. W. VII

“Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten” 1914 G. W. X

“Wege der psychoanalytischen Therapie” 1918 G. W. XII

<その他>

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編 『日本国語大辞典 第二版』  
小学館 2001

国松孝二編 『小学館 独和大辞典』 小学館 1985

ラカン、J述、J-A・ミレール編、小出浩之 他訳 『フロイト理論と精神分析技法に  
おける自我（下）』 岩波書店 1998